

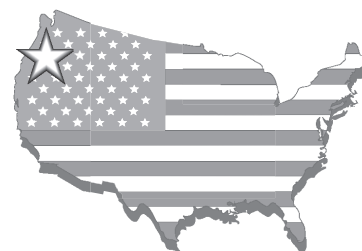


Tokyo, JAPAN

アメリカ留学日記 私の異文化体験記 (7)

早稲田大学文化構想学部 3 年

三浦 礼子



Portland, OR, U.S.A.

2009 年 9 月から 2010 年 6 月まで、オレゴン州ポートランドの Portland State University に留学しています。

8 月の期末試験が無事に終了し、ついに私の約 1 年間の留学生在生活が幕を閉じました。夏学期が始まってからの 3 カ月間は、この留学生活の中で確実に一番楽しく、充実した日々を過ごすことができました。そして満足のいくかたちで帰国の日を迎えることができました。

最終号となる今回は、私が帰国前と帰国後にそれぞれ感じたことをお伝えできたらと思い、帰国する1週間ほどまえに書いたものと帰国後しばらくして書いたものを合わせて掲載させていただきます。

帰国前の心情

帰国日が近付くにつれて、1年間過ごしたポートランドという街、そしてここで出会った人たちと離れたくないという思いが募っていきます。日本に帰ってから一番恋しくなるのはやはり友達でしょう。

この夏、私が毎日のように一緒に過ごしていたのは国籍の豊かな約 15 人。アメリカ、韓国、ベトナム、サウジアラビア、ネパール、ベネズエラ、ガーナ、スイス、日本。留学生向けの国際交流のイベントがきっかけとなって知り合いの輪が広がってゆき、いつの間にか私たちは毎日顔を合わせるのが当たり前の仲になっていました。国籍も、第一言語も、宗教もばらばら。それでも一緒に過ごす時間やお互いの文化の違いを発見することが楽しくて、笑いの絶えない日々を送っています。年齢はみんな近いのですが、大学に入る前までの約 20 年間でそれぞれが違った文化の中で育ってきたのですから、当然価値観の違いを感じることが日常会話の中でも多々あります。日本人のステレオタイプとして、よくシャイだとかおとなしいという形容詞が挙げられますが、それを裏付ける体験もしばしば。欧米圏で生まれ育った人のほうが、言葉による意思疎通に大



いつも一緒にいた国際色豊かな
友達との集合写真

きな比重を置きます。彼らは相手に伝えたいことはその場ですぐに発言し、情報を共有することを大切にしているのです。それとは反対に日本では、言葉に頼らない方法、たとえば場の空気を読むだとか相手の気分を

察するだとか、そういったコミュニケーション能力が評価されている気がします。価値観の違いとしてもう一つ例を挙げるならば、身近な食事の場面において、宗教によって食べられないものがあったりマナーが違ったりするということがあります。イスラム教の人は豚肉を食べませんし、夏には1ヶ月間のラマダーン（1ヶ月間の絶食月）もあるので、その期間は日没後にしか食事をとれません。比較的に日本と文化的な共通点が多い韓国でも、生の魚を食べることはあまりない、など私にとっては意外な事実もありました。その他にもこういった小さな発見を積み重ねることで、お互いの国への理解が深まり、相手への理解が深まることで私たちは親しい友人となったのです。

今では当たり前となってしまった自分と異なる文化に触れるこんな日々にも、もうすぐお別れを言う日が来るのかと思うときもあって仕方ありません。一緒に時間や経験を共有することって、とても価値があることだと私は感じます。ここで出会った人たちとも、まさにそんな意味のある時間を共にできたのではないかなと思っています。彼らのおかげで、このアメリカという場所が、必ずまた戻ってきたい土地になりました。今まで知らなかった国への興味がますます深まりました。目標や夢をもっている人に多く出会って感化され、私の留学生在生活も最後まで充実させることができました。日本から応援してくれていた家族や友人、先生も含めて、たくさんの人に感謝の気持ちを伝えたいです。



1月に出会った
カンパセーションパートナー
Risa との空港でのお別れ